



不登校経験の語りをきく : 当事者の経験の意味づけとその過程

井倉, 未樹

(Citation)

神戸大学発達・臨床心理学研究, 15:35-42

(Issue Date)

2016-03-31

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/E0040948>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/E0040948>



不登校経験の語りをきく —当事者の経験の意味づけとその過程—

Listening to the story of “Futoko” (school non-attendance) :
Its meaning and the process of the experience of people concerned

井倉 未樹*

Miki IKURA*

要約: 不登校を取り巻く様々な文脈背景において、当事者はどのように不登校経験をとらえ直しているのだろうか。経験を振り返る今に至った経緯と“その後”に着目したい。当事者であり、“その後”において不登校支援を経験した者4名に対し、半構造化インタビューを1名につき3回ずつ行った。内容として、「不登校経験についての語り」は当時について振り返って語られたもの、不登校に対する考え、自分自身の変化などである。「支援活動についての語り」は支援活動をするに至ったきっかけや、支援活動をする中での気づき、自分自身の変化などである。分析の結果、不登校経験の語りからは、不登校という個別の体験の意味が、葛藤や当時の自分との変化を認識するなかで意味づけられていた。自身の支援活動についての語りでは、経験を活かすことへの葛藤、迷い、意義の模索など、支援者の立場から自身の経験が捉え直されていた。こうした体験過程の語りは、現在の彼ら自身の状況と密接な関連をもっている。不登校という個別の体験は、その後も個々の現実のなかに位置づけられ、相互に作用していく。彼らの語りは、生き方の一つとしての不登校を提示し、当事者固有の視点を提起している。

問題と目的

1. 現代社会における不登校

現在不登校とは、病気や経済的な理由を除いた年間30日以上欠席という定義がなされているが、その概念や理解は歴史的な変遷をたどってきた。滝川(2005)は、『不登校』それ自体のあり方も、『不登校』をどう捉えるかの問題のあり方も時代とともに移り変わっている」とし、時代や社会背景との複合的な関係を論じた。近年、不登校は「質的な多様化と複合化が顕著(伊藤, 2011)」であり、きっかけや状態像、そしてその支援も多様化している。花輪(2011)は、「不登校は単なる神経症や個人・家族病理などを超えた問題であり、家庭、学校、社会という子どもを取り巻く環境にも注意すべき」であると指摘した。

このように不登校は、多様であるがゆえに個別的な対応を要すると同時に、個人あるいはその周囲のごく一部だけでなく、より大きな単位のなかで捉えていく視点が必要とされる。

伊藤(2005)は多様化した不登校への基本姿勢として、①進路の問題としてとらえる、②保護者を支える、③ネットワークとして関わる、の3つの視点を再確認する必要性を述べた。進路の問題について伊藤(2005)は「不登校の子ども自身の気持ち、その子どもが持つ『生きていく力』、それを支える環境(人的支えも含めて)を総合的に支援することが求められている」とした。また、不登校追跡

調査を行った森田(2003)はその調査結果から、「進路形成の問題」の解決が「心の問題」の解決に大きく影響すると考察し、学校や仕事への所属など「社会との関わりの形成」の支援が必要であるとした。こうした流れから、文部科学省の生徒指導提要(2010)では、不登校を「心の問題」としてのみとらえるのではなく、広く「進路の問題」としてとらえ、その支援は「社会的自立に向けて自らの進路を主体的に形成していくための生き方支援」であると明記された。つまり、「進路の問題」という言葉に代表されるように、当事者が不登校状態にある時点だけでなく、不登校のその後を見据え、本人の人生における生き方の問題として、より大きな視点からの支援や働きかけの必要性が認識されてきている。

それでは、こうした不登校を取り巻く社会や様々な背景、文脈のなかで当事者は自身の経験を経てどのように生きていくのだろうか。貴戸(2004)は、『かつての不登校経験は、その後の生活のなかで、いったいどんな意味を持っているのか?』それを『当事者』がみずから問い、語る必要性が、生まれ始めている」と、当事者の視点から不登校を問い直す必要性を述べている。

2. 不登校の当事者研究と語り

多くの不登校当事者研究では、社会のなかに不登校がどう位置付けられてきたのか、そしてそれらに対抗する声として当事者による新

*神戸大学大学院人間発達環境学研究科教育研究補佐員

たな不登校への理解が提言されてきた。また、当事者が自らどのように経験をとらえ、経験を位置づけているのかという、不登校経験者の生の声として発信されてきた。これらは当事者の声を代弁し、当事者をとりまく人々や支援に関わる専門家に新たな知を提供し、ひいては不登校についての社会的なまなざしを変革しうる力をもつものとして、非常に重要な位置づけにある。

では、ひとつの生き方として経験を当事者が語る時、当事者のなかで不登校経験はどのようにとらえ直されていくのだろうか。

貴戸 (2004) はその著書において、不登校が学校に行かないことの「選択」とされてきたことの意義と課題をふまえ、当事者の語りから「不登校者にとって不登校とは何か」を問うた。そして当事者による不登校経験とそれに対する意味づけの多様性を示し、当事者が不登校を肯定するうえで『不登校によるマイナス』を引き受けながら、みずからの経験としての不登校を『肯定』的に意味づけることに言及した。松坂 (2010) は「不登校経験の意味づけが変化する可能性や、その時々の意味づけがその後の人生に対してもつ発展可能性を捉えていく必要がある」とし、経験の「自己資源化の可能性」を提起した。こうした、不登校経験が当事者の人生においてどのような意味、役割を持つかという問いは、人生の中で経験がどう意味づけられていくのかという問いとして受け取ることができる。

本研究では、不登校経験者の語りの内容を通して、不登校経験が当事者自らにとってどのような意味をもつのか、『当事者』の多様性と、『当事者』に固有の位置性 (貴戸, 2004) に着目したい。そして、経験の個別的な意味を探るとともに、経験が意味づけられることのもつ可能性とその意義について考えたい。

ここで、個人の現実を語りの中で意味づけ、再構成していく方法論として、ナラティブに着目したい。ナラティブ・アプローチは、野口 (2005) によると、「ナラティブ (語り、物語)」という視点から現象に接近するひとつの方法である。Bruner (1990 岡本ほか訳 1999) は物語によっていかに経験が組織化され、意味が生成されるかに焦点をあて、それらの本質について述べた。やまだ (2000) は、物語を、「2 つ以上の出来事 (events) をむすびつけて筋立てる行為 (emplotting)」と定義し「意味は、時間の流れのなかで、2 つ以上の出来事をむすびあわせる物語行為のなかで発生する」とした。また、ナラティブは、語るという行為と密接な関係にある。能智 (2011) は、「語り」によって体験や自己が作られるという面があり、また、体験も自己も実体として存在するわけではなく、それにかたちを与え、意味を作り上げることが「語り」の役割であるとした。これは、ナラティブ・アプローチにおける「人は生きている現実を積極的に構成し意味を作り出す存在であるという人間観 (森岡, 2008b)」が背景にあるといえる。

そして、やまだ (2000) は、『私の経験』を語ることは、『経験の共有者』としての『私たち』を生み出すとし、経験は他者と共有され、ひらかれたものとなっていく。森岡 (2015) はナラティブが有する視点として、「個人の生きることの多様性に入り、個人の生活の支えとなる潜在した知恵を引き出し、人と共有する形にする」と、個別的な出来事とその意味を持つ可能性について述べた。

このように、個人の文脈から切り離さず、当事者の生きる現実に向き合っていくという視点は、不登校という体験がもつ個別の意味に注目し、それらの人生における位置づけや可能性を問うという目的

において、有用であると言える。

不登校概念の変遷とそれをとりまく社会には密接な関係があるとされる。ここで本研究の意義として、不登校の当事者はどのように不登校という現象の当事者として生きているのか、そして不登校の「その後」、どのように経験を問いなおし、意味づけを行っているのかに着目することで、不登校を一つの生き方として理解し、臨床的援助を必要とする当事者理解の一助となると考える。

ここで、不登校経験について振り返り、語るができる者として、自らが不登校支援に携わった経験のある者を研究協力者とした。当事者としての経験をもちながら支援に携わることで、自身の経験の理解、意味づけをより深めるきっかけを得ていると考える。

方法

1. データ収集

1) インタビュー調査期間・協力依頼

2012年9月～12月にかけて行われた。協力者は筆者が活動していた不登校支援団体にて、不登校支援を行っていた、または行っている者のうち不登校経験のある者に研究協力を依頼した。

2) インタビュー手続き

1名につき3回の半構造化インタビューを実施し、1回につき60分～90分であった。インタビュー実施後、録音した音声データを文字起こし、逐語録を作成した。1回目以降のインタビュー開始時には、前回の概要を協力者と確認する手続きをとった。

3) インタビュー項目

主な内容は大きく分けて不登校経験、不登校支援活動の経験の2点である。1) 不登校経験は、i) 経緯、背景、ii) 自分自身、iii) 支え、印象的なこと、iv) 状況の理解、v) 不登校理解、vi) 経験の意味に分類した。2) 不登校支援活動は、i) 経緯、活動内容、ii) 気づき、iii) 不登校支援への理解、iv) 経験の意味に分類した。以下、インタビューでの質問項目をTable.1に示した。

領域	知りたい事柄	聞き取り項目
不登校経験	経緯	[きっかけとその経緯] [当時の状態、様子]
	背景	[学校、家庭におけるエピソード] [受けていた支援]
	自分自身	[自分の性格、傾向]
	支え、印象的なこと	[支えになったもの] [印象的に残ったもの]
	状況の理解	[当時の状況をどう理解していたか] [自分の状態を不登校と意識していたか]
	不登校理解	[不登校に対するイメージ、印象(当時)] [不登校に対するイメージ、印象(現在)]
不登校支援活動	経験の意味	[今の自分にとって当時の経験はどんな位置づけにあるか、どんな意味をもつか] [今後、当時の経験は自分にとってどのようなものとなるか]
	経緯	[支援を始めたきっかけ、経緯]
	活動内容	[どんな活動をしている(いた)か]
	気づき	[関わりの中で気づいたこと] [印象に残ったもの]
	不登校支援への理解	[活動におけるスタンス] [支援の課題]
	経験の意味	[今の自分にとって経験はどんな位置づけにあるか、どんな意味をもつか] [今後、経験は自分にとってどのようなものとなるか]
感想	3回のインタビューを終えて思うこと、感じる事	

2. データ分析

1人1人の語りを読み解き、個人の語りを分析するため、カテゴリ分析を行った。ここで「カテゴリ分析」という用語は、能智(2011)に倣ったものであり、本研究での分析手順を以下に示す。まず語りを【不登校経験についての語り】、【支援活動についての語り】に大きく分け、主な出来事やその時期で大きく語りを分けた。次に、【不登校経験についての語り】、【支援活動についての語り】において、1) 繰り返し出てくるキーワード、2) 当時の状況・出来事について語られたエピソード、3) 当時の状況や自分自身についての語りになされた部分を、重要な語りとして簡潔な言葉で表現し、その類似性や関連性に基づいてカテゴリ化した。

結果と考察

1. 研究協力者

以前に不登校を経験し、その後不登校支援を行った経験のある、またはインタビュー時においても継続して行っている4名(20歳~24歳の男性2名、女性2名)が研究協力者である。研究協力者らは平成15~19年に中学を卒業し、全員が何らかの教育機関を経て大学へと進学していた。文部科学省の「不登校に関する実態調査——平成18年度不登校生徒に関する追跡調査報告書——(2014)」では、平成18年度における中学卒業時の進路について、高校進学率は85.1%、そして5年後の平成23年時点の就学状況として「大学」に就学している者の比率が19.0%で最も多く、次いで「専修学校(専門学校)・各種学校」が14.9%となっている。今回の調査協力者は、森田(2003)の述べた「進路選択の問題」としては、社会適応的な文脈にあると想定され、協力者による語りは不登校の「その後」の一側面であると言える。

Table.2 研究協力者のプロフィール

No.	仮名	性別	年齢	現在の所属	活動期間	主な不登校活動内容 ※網掛けは現在も活動中の内容
1	木村絢香	女	20	私立大学・文学系 2回生	1回生(春)~	親の会(企画運営)
2	山田のぞみ	女	21	私立大学・心理系 3回生	1回生(秋)~	メンタルフレンド (適応指導教室)
3	吉川康介	男	23	中学校教諭 1年目	1回生(秋)~	親の会(スタッフ) 家庭教師
4	松井さとし	男	24	フリーター (来年度より通信制大学教職課程)	2回生(夏)~	講演会でのスピーチ メンタルフレンド (居場所、家庭訪問)

2. 語りの分析

語りの分析を事例1~4として提示し、表(Table.3~6)には、【不登校経験についての語り】と【支援活動についての語り】における重要な語りをまとめたカテゴリを<>で示した。カテゴリは、自身の不登校の状況についての語り、印象深い出来事や人物についての語り、自分自身についての語り、不登校に対する理解についての語り、経験の意味についての語りをまとめた。これらは繰り返し語られたり、悩みや葛藤、気づきやそれに伴う気持ちの表現がなされ、自身に関連が強く重要な語りと判断した。これらをより大きな時期や状態像としてまとめたカテゴリを [] で

示した。

以下、インタビュー場面における不登校経験と不登校支援についての語りから、語り手が経験した出来事をどのようにつなぎ、語っていたかを提示する。

1) 事例1 (木村絢香さん、女性、20歳)

現在、私立大学の2回生で、不登校支援として半年前から親の会の企画運営を行い、当日はスタッフとして自らの経験を話したり、当事者家族と話しかけることもある。

木村さんの【不登校経験についての語り】には、

[病気をめぐる葛藤] ①<病気を恨む自分>、②<病気に振り回されていた自分>、③<病気の理解>、④<客観視>、

[不登校をめぐる葛藤] ⑤<当時の自分>、⑥<不登校イメージの変化>、⑦<当時を肯定する自分>、⑧<不登校経験に意味を見出す自分>カテゴリーがみられた。

Table. 3

【不登校経験についての語り】	
[病気をめぐる葛藤] ①<病気を恨む自分>、②<病気に振り回されていた自分>、 ③<病気の理解>、④<客観視>	
[不登校をめぐる葛藤] ⑤<当時の自分>、⑥<不登校イメージの変化>、⑦<当時を肯定する自分>、 ⑧<不登校経験に意味を見出す自分>	
転機1: 転校	「もう最悪、それだけで絶対他人と差が出る」「入学前は、完全に落ちこぼれやと思って」
転機2: 高校生活	「今までの自分を知らん(…)ほんまに何も知らん人やからうれしかった」、「普通に行くのが楽しい(…)ちょっとずつ自信取り戻して」
転機3: 留学	「ああ懐かしい(笑)この中でめっちゃいい思い出これ」、「なんか一皮むけたっていうか」
【支援活動についての語り】	
⑨<支援における迷い>、⑩<自分にとっての支援活動の意味>、 ⑪<親の会での役割>、⑫<母親への想い>	

木村さんは中学2年生からご飯がたべられなくなり、「自分はどっちかっていうと病気でしんどかったみたい」「なんかそっちのせいにしたかったんかな」と不登校状態を認めたくない気持ちがあったと語られた。病気に対しても「なんでこの病気になってんやろって、ずーっと恨んで」と否定的な感情、葛藤を抱いていた。また、不登校について「行け行け行かれた立場」であり、そこで行けなかった後悔や家族との関係が語られた。

木村さんは当時の自分について振り返り、「しんどい未来しか見えてなかった、暗闇(…)家出れんのが続くとか、社会的に一番やろうって」と語ったが、不登校という経験をしたから出会えた人、それらが今の自分に影響があったと語り、「もうそんな悩んでいいのになって思います(…)うんそう全然間違ってたなとは思いますが」と、以前の自分について肯定的にとらえなおされていた。

しかし現在の自分について「ちょっとまだうまくできん」と笑顔で語った。木村さんは「何事もストイックとか真面目にやらんと気が

済まんタイプ]、「けどある程度自分を持てるようになった、自分のこと話せるように」、「だいぶ客観的に見れるようになってきたような気が(…) やっと、って感じ」と当時と現在の自分を重ねながら、自身の変化を語った。

【支援活動についての語り】には⑨<支援における迷い>、⑩<自分にとっての支援活動の意味>、⑪<親の会での役割>、⑫<母親への想い>カテゴリーがみられた。支援活動のきっかけについて、「もっと色んな人がいる(…)何かしてあげられることはあると思った」と、きっかけにおいて、人の役にたきたいという気持ちが語られた。

現在、支援という形で不登校に関わり続けている自分について「不登校ってことに引っかかりすぎとんやろうかなー」と疑問をもちながらも、「人前ではそんな言わんけど、親の会やったら自分の経験もゆって(言って)、それをあーって聞いてもらえるからやっぱり続けたいなーって」、「知識的に増えたとか(…)視野が広がった」と自分にとっての支援活動の意味が語られていた。また、支援の場で子どもの代弁者として経験を語り、親の理解者として話を聞くことで「自分の母親をみて思ったこと(…)そういうのをできるだけ伝えたいかと思いました」と親の会での自分の役割が意識されていた。また、自身の母親との関係が振り返って語られた。

一方で、「木村さんのようになればと思いますって(…)うちの子はなんでうまくいかんのやろうかと思われたらどうしようか」と「不登校経験ある人はみんな成功例みたいな感じ」として見られることへの不安、当事者として経験を話すことの影響の大きさについても語られた。

2) 事例2 (山田のぞみさん, 女性, 21歳)

現在、私立大学の3回生で、不登校支援として半年前から適応指導教室に週1回、メンタルフレンドとして活動している。

山田さんの【不登校経験についての語り】には、
 [何となく行けない状態] ①<分からなさ>、②<衝撃の強さ>、
 ③<状況の理解>、④<登校を意識>、⑤<分校での生活>、
 [高校中退] ⑥<高校への違和感>、⑦<普通ではない自分>、⑧<勉強への思い>、
 [普通の生活になる] ⑨<普通の生活の実感>⑩<大学生活を続けている自分>カテゴリーがみられた。

Table. 4

【不登校経験についての語り】
[何となく行けない状態] ①<分からなさ>、②<衝撃の強さ>、③<状況の理解>、 ④<登校を意識>、⑤<分校での生活>
[高校中退] ⑥<高校への違和感>、⑦<普通ではない自分>、 ⑧<勉強への思い>
[普通の生活になる] ⑨<普通の生活の実感>、⑩<大学生活を続けられている自分>
【支援活動についての語り】 ⑪<支援の意味とその必要性>、⑫<自分を重ねる>、 ⑬<支援の実感>、⑭<子どもと関わるスタンス>

きっかけとして語られた、小2の担任とのいざこぎについて山田さんは戸惑いが大きく、小5になるまで誰にも話さなかった。当時の状況が詳細に語られ、「普通はされないことなのかなって今だに思う(…) みんなひどいって言ってるからひどいのかな」と経験がはつきりと意味づけされず、模索するように語られた。一方で学校に対し「行かなきゃな」という気持ちが強く、その後高校、大学を通してであった。

山田さんは不登校について「(学校を)飛ばす/特殊/外れる」という言葉を用いて表現し、現在の自分は不登校を抜けた状態だと語った。これまで影響が大きかったのは家族とカウンセラーであり、支えられた経験を振り返って語った。今でも、「些細なことで引っかかってやっぱり学校行ってないからかなとか」と勉強面でのマイナスや、普通ではない自分を意識しながら「何か不思議だなんて、何年か前まで絶対学校行きたくないと思ってたのに」、「いろいろ飛ばした割にはよくやったなっていうのは最近も思います」と、以前とは違った状況にいる自身の変化について、意味づけがなされた。

不登校についての考えを、「行けない時は行けないし仕方ないんだろうし、ただいつか行かないとだめだよなって」、「休まないとうしろもない時がある、ただ人間として暮らすために働かなきゃいけないって時、いつか戻らないといけない空間、外れてまた戻るのも大変で」と語り、戻るべきものとして社会が強く意識されていた。

【支援活動についての語り】には⑪<支援の意味とその必要性>、⑫<自分を重ねる>、⑬<支援の実感>、⑭<子どもと関わるスタンス>カテゴリーがみられた。支援のきっかけについては、もともと不登校支援に携わりたい気持ちがあり、「してもらった分は、社会貢献でもどこかでお返ししないといけない時はあるんだろうな」と語った。

子どもとの関わりにおいて「学校に行っていないが故にあの一やりにくいなってところがあるのが想像つきやすい」と、子どもの目線になれることが、自身の経験の意味について語る際に結び付けて語られた。そして、当時の自分と目の前の子どもを重ねながら、当時感じていたことを振り返り、また、自身が第三者である大人に関わってもらった経験を振り返りながら、子どもとの関わりにおけるスタンスについて語られた。一方で、「(経験を)あまり活かしすぎてしまうと、とりあえず様子見るかって(…)周りの大人がいた方がどうのってそれも恩着せがましいよねと思います」と、自分の経験がすべてではないと意識しながら、自分と支援をする相手の関係を相対化しようとする視点がみられた。

3) 事例3 (吉川康介さん, 男性, 23歳)

現在、「部類で言うと荒れている」中学で教師を始めて9カ月ほどが経った時点である。大学時代には、主に家庭教師として不登校の子どもたちと関わった。他に、親の会のスタッフとして通年6回ほど参加し、不登校の子どもをもつ親に自身の経験を話す活動を行っていた。

吉川さんの【不登校経験の語り】には、
 [居場所を取り戻す] ①<居心地の悪さ>、②<勉強へのあきらめ>、③<イライラ感>、④<別室登校という支え>、
 [高校生活] ⑤<高校生活>、⑥<先生へのイメージ>カテゴリーがみられた。

Table. 5

【不登校経験についての語り】
[居場所を取り戻す] ①<居心地の悪さ>, ②<勉強へのあきらめ>, ③<イライラ感>, ④<別室登校という支え>
[高校生活] ⑤<高校生活>, ⑥<先生へのイメージ>
【支援活動についての語り】 ⑦<不登校の子どもの家庭との関わり>, ⑧<教師としての子どもとの関わり>, ⑨<目指す教師像>

吉川さんは、起立性調節障害により小学校5年生の頃から学校に毎朝行くことができなくなった。「親もずる休みちやうかみみたいな雰囲気」、「放っとけよみたいな人と関わるのが面倒くさくなった」と、家庭内での居心地の悪さ、人と関わることへの不自信が語られた。別室登校において「息抜きにしか行ってなかった(…)」という意味では充電だったのかも知れない」と、支えとなった別室登校について意味づけがなされていた。また、小1冬に転校した前の学校の先生とは今でも関係があり「お兄ちゃんみたいな感じやったんかなあ」と当時を振り返り、当時にまつわるエピソードがいい思い出として語られた。自ら転換期と表現した高校生活は、「楽しかった、やりたい放題」と、今までとは違う経験を通して、自身が大きく変化したと意味づけられた。「そこで教師の目標像みたいな(…)自分もこういう人になれるといい、かなみみたいな」と、進路選択がなされる後押しとなった。

【支援活動についての語り】には支援活動の経験と、現在の教師の経験が合わせて語られ、⑦<不登校の子どもの家庭との関わり>, ⑧<教師としての子どもとの関わり>, ⑨<目指す教師像>カテゴリーがみられた。

支援のきっかけはたまたま見たビラで、「教職ついたときに生きることもあるやろうし(…)希じゃないですか、なんか普通の家庭教師はあるけど、不登校に特化した家庭教師って」と語られた。不登校生徒への家庭教師の経験では親子の考え方のズレに挟まれ、「親と子がお互いのことどう考えてるかって、伝えてあげる橋渡し役的な(…)結構難しい立ち位置」と難しさが語られた。「当事者だったのが、過去の自分に関わってるというか・もちろん他人だけど、この時どう思ってたかなって考えたり・もし担任で家庭訪問って考えたら、どんな働きかけがあるかなあとか」と、目の前の状況に当時の自分を重ね、教師の立場という視点をとりながら、支援する側としての役割が模索されていた。

現在の中学校教師としての仕事では、「自分と似たような子が今の勤務校にもいるし・なんとか学習の方に気を向かせようって」と子どもとのエピソードが多く語られた。子どもに対して「色々な意味で時間を無駄にしない」という想いが語られ、「もっと別の、ねえ違う時間の使い方が(…)いろいろあったやろう」、「無駄じゃなかったと思いますけど、うん、」と自分の経験が振り返られた。「やっぱ希望は高校なんやけどなぁと思いつながら(…)まあ縁がある・…と思って引き受けた」と、今後の教師生活については模索している段階であると語られた。

4) 事例4 (松井さとしさん, 男性, 24歳)

現在、1年半前から家庭訪問や適応指導教室、居場所でのメンタルフレンドをしている。これまで4回、自分の経験を不登校の子どもや親にスピーチする機会があった。

松井さんの【不登校経験の語り】には、

[家ですごす日々]①<中学でのギャップ>, ②<先の見えなさ>, ③<レッテル>, [自分を取り戻す] ③<宿泊キャンプ>, ④<不登校生との関わり>, ⑤<褒められる自分>, ⑥<学校にもどる>, ⑦<高校での自信>カテゴリーがみられた。

Table.6

【不登校経験についての語り】
[家ですごす日々] ①<中学でのギャップ>, ②<先の見えなさ>, ③<レッテル>
[自分を取り戻す] ③<宿泊キャンプ>, ④<不登校生との関わり>, ⑤<褒められる自分>, ⑥<学校にもどる>, ⑦<高校での自信>
【不登校支援についての語り】 ⑧<自分の経験を語ること>, ⑨<経験を活かすという選択肢>, ⑩<進路の転換>, ⑪<子どもとの関わり>

松井さんは小学校の頃から体調を崩しやすく、中学は1年の9月から3年の後半まで行けなかった。そして中学2年から3年にかけて参加した宿泊キャンプに大きく影響を受けたことが語られた。そして中3の最後に、松井さんの担任の先生への信頼感、先生からの誘いのタイミングが重なってクラスに入ることができた。

不登校の状態について、「レッテルだけでマイナスイメージやし、それまたぶんお父さんからしたらものすごい嫌やったと思う」、「色々親戚からも親からも、ものすごい否定されて」という経験をもちながら、キャンプを通して「自分を認められるように」なると語られた。自分にとっての不登校経験については、「むしろそれがあったからこそ、キャンプに出会えて、(…)自分のなかでやっぱ誇りやったんかなあって」、「結構不登校に対して認められて、そっからは全然そこまで、学校に対して嫌な気持ちはあんまりなかった」と、キャンプという存在が支えになり、自分の状態について認識が変化したことが語られた。同じ不登校状態にある同年代と関わって経験を共有し、スタッフの声掛けから自分を認め、不登校状態である自分への意味づけも変化した。そうした自身の変化を語り、「根本、そうそう、全部繋がってたんかなって」と現在に至る出来事をつなげて意味づけがなされた。

【支援活動についての語り】には⑧<自分の経験を語ること>, ⑨<経験を活かすという選択肢>, ⑩<進路の転換>, ⑪<子どもとの関わり>カテゴリーがみられた。

支援のきっかけとして、「高校の時から大学生になったら絶対行く(…)お兄ちゃんみたいな感じ、憧れの存在」と、キャンプの経験から強く意識されていた。そして、支援活動を行うなかで引き受けることになったという、不登校経験のスピーチは、現在の松井さんにとって大きな意味をもつものであったことが語られた。「経験を話して、反響も結構あったものすごく嬉しかった」、「こっちの方で

やりがいを見出せるんちゃうかって」と周囲の反応も相まって、経験を活かすことの意味、やりがいを実感し、自身の将来についても模索するきっかけとなっていた。

「高校の時から車好きで・車関係の仕事ってずっとと思って(…)こういう風になったのは自分でもものすごい意外」と、進路の転換に関して揺らぎながらも、方向性を決めていったことが語られた。そのなかで、「実体験として自分が持って、子どもに対して伝えたらいいかな」、「お互い成長できるっていう、ことを実感できたから、そういう意味ではやっぱり教師っていう」と実際に子どもと関わるなかで得た実感について語られた。また、自分が教師になることについて、「まず学校に何ができるかなっていうのが(…)現場で自分がそういう経験もってなにができるかなっていう、挑戦でもあるのかなって」と、自身の今後において経験を活かすことの意味や、役割という視点が強く意識されていた。

総合考察

1. 当事者の語りと経験の意味づけ

不登校の経験について、研究者である聞き手がインタビュー項目に準じて質問をし、インタビューを行った。協力者からは、それぞれのしんどさや葛藤、当時の状況、そして現在に至るまでの出来事や変化が語られた。協力者によって語られた内容は聞き手が経験の意味づけに着目して事例1~4としてまとめた。これらは、それぞれ多様な経験であり、当事者の経験をふまえた個別的な意味をもち、個々のテーマや文脈が内容に反映されている。ここで、人数が少数に限られたものであり、個別の多様な意味を提示するために4名の内容的な共通点を抽出するという手続きは控えた。

まず、経験を語ることで、経験の意味づけについて述べたい。協力者の語りから、現在に至るまでに語り手の中にはすでに様々な意味づけが存在することが伺えた。これらは、転換点のような時期や出来事を経たことや、支えとなる人との関わりを通して、すでに語り手のなかに存在していたものようでもある。では、インタビューの場で、過去の経験や語り手の中に潜在する意味づけを語り、聞き手と共有することは、語り手にとってどのような体験となるのだろうか。やまだ(2004)は、「意味は人間の内側にしまいこまれている実体ではなく、語り手と聞き手の相互行為の中に現れてくる」とした。語り手と聞き手の相互行為、つまりインタビューにおける対話の中で、語り手の経験は共有され、対話のなかで意味をもつものとなると考えられる。

森岡(2008a)は、語りを通じて今ここで立ち現れてくる意味(its meaning now)に焦点をあて、出来事と出来事をつながりという生きた連関を通じて生起する微細な意味の行為(micro meanacting)を共有しようとする視点を「小さな物語」とした。これに対し、ライフ・ストーリーのなかで自己の病の意味をとらえる視点を「大きな物語」とした。インタビュー場面では、「大きな物語」として自身にとっての経験の意味を語る視点を持ちながら、これまでの出来事を今、語ることによって新たに生じた「小さな物語」が混在している可能性がある。経験を語ることは、ただ伝えるだけではなく、語ることによって語り手のなかに新たな意味を生じさせる、意味を生んでいく行為と言える。よって、経験の意味づけについて、語り手と聞き手との対話において「小さな物語」として意味が生じうるこ

とが示唆される。

ここで、出来事と出来事をつなぐという点に着目したい。語るという行為には、過去の経験と現在の自分をつなぐという働きがある。過去の経験や出来事の主体として語られた自己と、物語る主体としての語る自己は「自己の二重化(森岡, 2008a)」とし、語りのなかに現れるとした。

木村さんは、現在の自身について「ちょっとまだうまくできん(笑う)」と語りながら、「けどある程度自分を持てるようになった、自分のこと話せるように」と自身で変化を認める部分と、まだ課題として感じられる部分との両面を語った。山田さんは、当時の学校での出来事については腑に落ちなさが語られ、納得のいかない事柄や苦しんだ経験を語りながらも、「いろいろ飛ばした割にはよくやったっていうのは最近も思います」と自身の変化を認めていた。これらの語りは、今までの自分を全く別の自分としてとらえているわけではなく、語りを行っている現在の自分と、当時の自分を重ねながら語っているといえる。

また、自身の変化だけでなく、現在の自分への影響や、当時を振り返ることで得られた新たな気づきについても語られた。吉川さんは、教師としての自分という視点から、支えられた経験や高校生活において自身に強く残った影響などを語った。松井さんは、当時支えとなったキャンプや居場所のスタッフとして自らが関わることで、連続して居場所と関わってきた自分が意識されていた。さらに将来の選択にも不登校経験が影響し、そうした経過を振り返って「根本、そうそう、全部繋がってたんかなって」と自身の経験への気づきを得た。このように、現在の自分の視点を介し、インタビュー場面での気づきや意味づけが語られていたといえる。

これについて浜田(2009)は「視点が複数の登場人物のあいだを移動し、また過去、現在、未来、それぞれのあいだを視点が揺れ動きます」と述べた。つまり、当時の自分の状況を語ることににおいて、視点を当時の自分へとうつし、そして現在の自分へと視点を反復させながら語る必要がある。本研究で提示された事例は、語り手が、聞き手の質問に答えるという方向づけがなされた場面の中で、過去の自分と今の自分に想いを巡らせ、双方を行きつ戻りつしながら現実として立ち現れてきたものであるといえる。

こうして、過去の振り返りから現在の視点を介して経験を語ることで、今の自分からみた経験が語りなおされ、意味づけが変化していく可能性が示された。また、やまだ(2000)は「物語は、過去と現在の自己をむすぶだけではなく、未来の自己、可能としての自己(possible self)を有機的に意味づけて組織する」と述べた。現在の自分を通して経験を振り返り、過去の自分と現在の自分がつながることは、未来へと経験をつなげていく行為となりうる。それゆえ、経験の意味は、語られた時点からさらに未来へむけ発展していく可能性がある。

さらに、森岡(2015)は「複数の出来事をつなぐとき、場面と文脈の影響を大きく受ける。文脈が変化すれば、過去の出来事の意味づけもまた変わるという特徴をもつ」としている。起こった出来事は不変であるとしても、どのように経験を語り、どのような点に着目して経験をとらえ直していくかということ、決して固定的なものにはなり得ない。語りの中で生じた意味づけは、人生の様々な場面において変化し、新たな意味が見出される可能性がある。場面や文

脈を重視して語りをとらえることは、当事者の語りを完結した物語としてみるのではなく、今後展開していくものとしてとらえる視点を提示している。

2. 経験を活かすことの可能性

支援活動のきっかけは様々であるが、きっかけにおけるそれぞれの想いとして、自分にできることがあるのではないかという気持ち、あるいは将来の自分にとっての意味を考えたり、自分がお世話になったことを返すという意味があると語られた。こうした思いをもちながら支援活動を行うことは、協力者にとってどのような体験であったのだろうか。

支援活動の語りにおいては、自分にとっての活動の意味や、子どもや親との関わりの模索、相手と向き合う中で自分の役割を意識するといった語りのカテゴリーが得られた。まず、活動に意味を感じたり実感を得ることには、支援を続ける中で、周囲や支援する相手からの反応に支えられていることがうかがえた。木村さんは、「人前ではそんな言わんけど、親の会やったら自分の経験もゆって(言って)、それをあーって聞いてもらえるからやっぱ親の会は続けたいなーって」と、支援をする中で、自分にとっての活動の意味への気づきがなされていた。松井さんは「経験を話して、反響も結構あつてものがすごく嬉しかった、その時にこういう言う風な活かし方もあるんやなって」と自身の経験を「活かす」という視点からとらえ直しており、そして経験を活かすことが自分の役割として意識されていった。これは自分の経験を、他者との関わりのなかで、意味あるものとして認めていくプロセスであるといえる。自身が経験してきたことを、活かすという視点でとらえ直すと、新たに経験に様々な意味がもたらされる。不登校支援は、協力者らが不登校経験について振り返る一つのきっかけとなり、経験から感じたり考え続けていたことを誰かに語り、不登校当事者と関わるなかで経験を活かすことを通して、経験の意味が再構成される可能性をもつ。

一方、支援活動について、経験を活かすことの意義とともに、不安や迷いとして語られることもあった。「経験を活かすすぎてもなって(山田さん)」、「木村さんのようになればと思いますって(…)うちの子はなんでうまくいかんのやろうかと思われたらどうしようか(木村さん)」という語りは、自身の経験がすべてではないことを意識しながら、相手に支援や解釈を押し付けてしまうのではないかという葛藤としてとらえることができる。当事者として支援を行うことは、自身が当事者として、経験者としてみられ、当事者ならではの視点を求められる。今尾(2007)は、当事者が当事者研究を行うことにおいて問題となる当事者性について述べ、「私は当事者『である』以上、当事者『という位置に置かれる』ということからまぬがられない。しかしそれを『引き受ける』ということは必ずしも、『有効に利用し役立てなければならぬ』ということを意味しない」とした。これは、協力者らが支援活動を行う中で、活動に意義ややりがいを見出すとともに、様々な葛藤や迷いをもつ可能性を示している。協力者らの経験が共有されることについて、個別の体験を語り手の文脈から切り話さずに伝え、提示することの難しさが示されているといえる。

また、支援活動について語る際にも、不登校当時の自分について語られたり、当時に影響をうけたことが振り返り語られた。支援活動

について振り返ることで、支援活動を行っていた自分と、不登校当時の自分を思い起こされ、それら両方の自身の視点が浮かび上がった。これは、支援活動の振り返りを通して、自身の不登校経験を振り返り、とらえ直すことになっていったといえる。

さらに、協力者にとって支援活動は、不登校を経験している相手の状況や場面へと視点を移しながら、自分の経験や考えと比較することで新たな気づきを得たり、支援の意味を考えるきっかけとなっていた。つまり、「当事者だったのが、過去の自分に関わってるといっか・もちろん他人だけけど、この時どう思ってたかなって考えたり(吉川さん)」の語りのように、支援活動を行い、目の前の当事者と向き合いながら、自身の経験を相対化させていたといえる。ここでの語りには、当時の自分と現在の自分だけでなく、様々な視点が語り手のなか存在し、インタビュー場面で自身の経験が問い直されていた。そして、語っている現在の自分においても、支援活動で得られた気づきなどがはっきりと意識され、現在の自分にとっての意味も語られた。特に、松井さんと吉川さんは、将来の仕事とのつながりにおいて経験が意識されることが多く、現在のその先を意識しながら、自身の経験が語られていた。

経験を活かすことは、その相手との関わりの中でまた新たな意味を生み出していく可能性をもっている。そして今後も支援活動を通して当時の自分と向き合うことを繰り返しながら、様々な文脈の中で自身の経験を引き受けていくことが示唆される。

3. 今後の課題

これまで、当事者の内側でどのような過程を経て、経験を意味づける行為が行われているかということに着目してきた。インタビュー場面で語る行為は、協力者らにとって、聞き手の質問を通して過去を整理し、語りとして経験をまとめていく作業であったといえる。本研究では、協力者らが自身の経験を語る行為に着目し、現在の自分の視点から経験をとらえ直し、意味づけていく行為について考察を行った。しかし、本研究では語り手に生じる意味づけにおいて、聞き手の役割や意義について考察が不十分であった。聞き手は、インタビューにおいて質問をするだけでなく、聞くことを通して様々な反応を行っている。今後、聞き手自身の反応がどのように意味づけに影響を与えているのかについても検討していくことで、当事者の意味づけの様相をより明らかにできると考える。

また、想起や自伝的記憶といった分野においても、自己の経験を意味づけていく行為について、多様な研究がなされている。経験の意味づけの過程や、それらがどのように語られるのかといった観点から、当事者固有の意味を記述し、描き出すためのさらなる検討を加える必要がある。

支援活動の語りでは、経験を活かすうえで様々な視点を自身の中に持ちながら、経験が問い直されていくことの可能性について述べた。しかしこうした経験の意味が、個別の文脈をはなれて他者と共有されることについては、協力者らの語りのなかにあったように、慎重さを要する。瀬戸(2001)は不登校問題について論じることに際して、「ある種の紋切り型の語り方に誘われてしまう」ことを指摘し、布村(2004)はさらに不登校現象の語られ方が、「日本の『世間の掟』に後押しされ」ていること、「不登校経験をしなくても『成長』『克服』を感じられなかった者たちに対して『成長しなければ』『克服しなけ

れば』と言ったような強迫的な感情を呼び起こす物語になりかねない」ことを指摘している。

本研究の協力者は、不登校当事者のなかでも、自ら支援に携わった者という非常に限定された協力者の語りであった。協力者の語りでは、支援に携わることで自らの経験と向き合っていく過程がみられたが、そうした選択をしない、機会をもたない者において自らの経験はどのように捉え直されていくのか、検討したい。

引用・参考文献

- Bruner, J. S. (1990). *Acts of Meaning*. Cambridge: Harvard University Press. (ブルーナー, J. S. 岡本夏木・仲渡一美・吉村啓子 (訳) (1999). 意味の復権: フォークサイコロジーに向けて ミネルヴァ書房)
- 浜田 寿美男 (2009). 私と他者と語りの世界——精神の生態学へ向けて—— ミネルヴァ書房
- 花輪 敏男 (2011). 「不登校像」はどうか変化したか——学校・家庭・社会の変化と連動して—— 児童心理, 65(9), 11-17.
- 今尾 真弓 (2007). 当事者「である」こと/当事者「とみなされる」こと 宮内 洋・今尾 真弓 (編著) あなたは当事者ではない——<当事者>をめぐる質的心理学研究—— (pp.80-91) 北大路書房
- 伊藤 美奈子 (2005). 改めて考える不登校の基本的理解 児童心理, 59(18), 14-21.
- 伊藤 美奈子 (2011). 不登校は今どうなっているか(不登校の現在) 児童心理, 65(9), 1-10.
- 貴戸 理恵 (2004). 不登校は終わらない——「選択」の物語から<当事者>の語りへ—— 新曜社
- 松坂 文憲 (2010). 不登校経験者が語る“不登校経験の意味”——“自己資源化の可能性”の提案—— 岩手大学大学院人文社会科学部研究科紀要, 19, 39-56. 文部科学省 (2010). 生徒指導提要 文部科学省 (2014). 「不登校に関する実態調査」——平成 18 年度不登校生徒に関する追跡調査報告書——
- 森岡 正芳 (編) (2008a). ナラティブと心理療法 金剛出版
- 森岡 正芳 (2008b). 物語としてのカウンセリング やまだようこ (編) 質的心理学講座 2 人生と病の語り (pp.193-216) 東京大学出版会
- 森岡 正芳 (編) (2015). 臨床ナラティブアプローチ ミネルヴァ書房
- 森田 洋司 (2003). 不登校——その後——不登校経験者が語る心理と行動の軌跡 教育開発研究所
- 野口 裕二 (2005) ナラティブの臨床社会学 勁草書房
- 能智 正博 (2011). 質的研究法 臨床心理学を学ぶ 3 東京大学出版会
- 布村 育子 (2004). 不登校経験の語られ方——不登校と引きこもりの接続を検討する—— 埼玉学園大学紀要(人文学部篇), 4, 35-48.
- 瀬戸 智也 (2001). 「不登校」ナラティブのゆくえ 教育社会学研究, 68, 45-64.
- 滝川 一廣 (2005). 不登校理解の基礎 臨床心理学, 5(1), 15-21.

やまだ ようこ (2000). 人生を物語ることの意味——なぜライフストーリー研究か?—— 教育心理学年報 39, 146-161.

やまだ ようこ (2004). 質的研究の核心とは 無藤 隆・やまだ ようこ・南 博文・麻生 武・サトウ タツヤ(編) ワードマップ質的心理学——創造的に活用するコツ—— (pp.8-13) 新曜社

※本論文は、平成 24 年度神戸大学大学院人間発達環境学研究科に提出した修士論文を加筆修正したものである。